

帝京大学 福岡医療技術学部 2023 年度 海外医療研修（デンバー研修）報告書

国際交流委員会

文責：三木菜緒美

<はじめに>

2023 年度は 4 年ぶりに福岡キャンパス独自の海外医療研修である「デンバー研修」を再開した。「海外の医療制度を学ぶ」という目的のもと、アメリカのコロラド州デンバーにて 8 日間の研修を実施した。参加者は、学生 28 名、引率者 3 名、合計 31 名であった。

	PT		OT	NS		RT	EL		CE	合計
	4 年生	3 年生	3 年生	4 年生	2 年生	2 年生	3 年生	2 年生	3 年生	
男性	3	1	0	0	0	0	2	3	1	10
女性	1	6	2	3	4	2	0	0	0	18
合計	11		2	7		2	5		1	28

※ PT: 理学療法学科、OT: 作業療法学科、NS: 看護学科、RT: 診療放射線学科、
EL: 医療技術学科救急救命士コース、CE: 医療技術学科臨床工学コース

海外医療研修実施にあたり、4 年というブランクがあること、また新型コロナウイルス感染症の影響、物価高と円安の影響など、様々な懸念材料があったため、例年よりもかなり早い段階で 2023 年度の実施予定を知らせる事前説明会を行った。具体的には、2/7、2/13、2/14 の 3 日間、対面およびオンラインにて、前回（2019 年度）のデンバー研修を紹介し、事前説明会を行い、本格的な準備に取りかかった。その後、4/7、4/10、4/12 に 2023 年度の研修内容についての説明会を行い、5/12 を締め切りとして参加者を募った。

久しぶりの実施となるため、昨年度コロナ禍で研修実施がなかったことを考慮し、例外的措置として、今回は対象外学年であっても希望者があればできるだけ参加できるように、各学科に特別な配慮をもらい、PT4 年生と EL3 年生は参加が可能となった。

「国際事情」（自由選択科目）として参加者全員が単位認定の対象となったため、事前研修を 5 回行い、昨年度までのオンライン海外研修（VEP）で講師をしていただいた各学科の先生に、現地研修でより良い理解につながる内容での講義をお願いした。また、全学科・コースが参加するのは初めてであるため、お互いを知るために毎回違うグループで英語の自己紹介をするなど学生の不安を解消する工夫も行った。帰国後は、事後研修を 4 回行い、現地研修でお世話になった先生へ英語のお礼状の作成・送付を行い、また現地研修の内容をプレゼンテーションとしてまとめ、全学生及び教職員を対象とした報告会を行い、「国際事情」のまとめとした。

現地研修中は、まず時差ぼけ解消、及び現地に慣れることを目的として文化体験を行った。レッド・ロック・パークのハイキング、美術館散策、MLB 観戦の 3 グループに分かれて各アクティビティを楽しみ、夜はホテルの中庭でウェルカム BBQ に参加して、渡航の疲れからの回復を図った。とはいえ、経由便で合計 30 時間もの移動の疲れから、高山病のような症状を訴える学生もいた。しかし、適宜休息をとり、次第に回復して、大事に至ることはなかった。

現地医療研修としては、レベル II 外傷センターのあるアドベントヘルス・パーカー病院と脊椎損傷専門のクレイグ病院、さらにドクターヘリで山岳救助も行う救急医療施設である聖アンソニー病院を訪問し、アメリカにおける最先端の医療を見学した。アメリカでの医療における諸問題への取り組みや、医療・リハビリテーションに対する考え方・価値観の違いなど、様々な点において日本と相違点があることを学生自らが発見し、積極的に質問をして自らの理解を深め、視野を広げている様子がどの施設でも見られた。

レジス大学では、PT の実習及び解剖学実習に参加させてもらい貴重な体験をした。また、今回は初の試みとして、希望者を募り、3 グループが英語によるプレゼンテーションを行い、その後、現地学生とのピザランチ交流会を行うなど、実りある経験をする事ができた。一方、参加学生のうち 2 名は、コロラド州立大学（CSU）の加藤宝光准教授のご協力により CSU を訪れ、加藤先生のラボや、学生が事前にリサーチしてリストアップしていた見学希望部署を巡り、様々な経験をする事ができた。過密スケジュールだったにも関わらず、各々が体調管理に気を配り、深刻な体調不良者が出ることなく、本研修を無事に終える事ができた。

<研修概要>

- 1) 期間： 2023年9月2日（土）～9月9日（土） 8日間
- 2) 参加人数： 学生 28名、引率者 3名、計 31名
- 3) 宿泊先： Staybridge Suites Denver-Cherry Creek
- 4) 内容の概要： ① 病院・医療施設訪問見学 ② 大学訪問見学、授業・実習参加
③ アメリカの医療に関する講義 ④ 文化体験（ハイキング、美術館散策、MLB 観戦）
- 5) 単位認定： 自由科目「国際事情（Overseas Cultural Affairs）」1単位
- 6) 引率教員： 椎葉美千代（看護学科教授）、三木菜緒美（作業療法学科准教授）、丸山倫司（理学療法学科講師）
- 7) 査証取得： 渡米前の事前研修にて ESTA を申請
- 8) 保険： 学研災付帯海外旅行保険
- 9) 費用： 渡航費用 318,630 円、海外留学保険 4,020 円、現地費用 306,958 円 / 合計 629,608 円
- 10) 企画管理部門： 帝京大学福岡キャンパス・国際交流委員会
- 11) 取扱業者： Colorado House International, LLC、株式会社近畿日本ツーリスト、株式会社帝京サービス

<現地研修スケジュール>

9月2日（土）			
08:00 福岡空港国内線集合 福岡空港（10:15 発）→羽田空港（11:55 着）→羽田空港（21:10 発）→ロサンゼルス国際空港（15:35 着） →ロサンゼルス国際空港（21:09 発）→デンバー国際空港（翌日 00:34 着）→移動（チャーターバス）、ホテルチェックイン			
9月3日（日）			
	ハイキング組	美術館組	MLB 観戦組
09:00	ホテル出発（小型バン）	自由行動	
10:00	レッド・ロックス・パーク到着		
11:30	ハイキング（2km コース） *園内ピクニックランチ	ホテル出発（チャーターバス）	
12:00		クアーズ・フィールド・スタジアム到着	
13:00		昼食（ユニオン駅構内 @Snooze）	13:10 MLB プレイボール
14:00	出発（小型バン）	徒歩と路面バスにて移動 デンバー美術館散策	コロラドロッキーズ vs. トロントブルージェイズ
15:00	ホテル帰着、解散、自由行動	出発（タクシー）	
16:30		ホテル帰着、解散、自由行動	出発（チャーターバス）
17:00			ホテル帰着、解散
18:00	特別講演 関川先生（RT 助教）（@ホテル会議室）		
19:00	ウェルカム BBQ デイナー（@ホテル中庭）適宜解散		
9月4日（月）			
09:00	ホテル出発（チャーターバス）		
10:30	オリンピック&パラリンピック・トレーニング・センター見学 公式ギフトショップ → 館内ツアー → スポーツ・メディスン部署見学		
12:30	移動（チャーターバス）		
13:30	アウトレット・ショッピングセンター（3時間 30分） 各自昼食、及び自由行動（@Castle Rock）		
17:00	移動（チャーターバス） 17:45 ホテル帰着、解散、夕食（各自 or ホテル無料軽食バー）		

9月5日(火)	
08:00	ホテル出発(チャーターバス)
09:00	アドバントヘルス・バーカー病院 レクチャー1 / レクチャー2 / 院内ツアー(3グループに分かれて) / 昼食 / レクチャー3 / レクチャー4
13:00	移動(チャーターバス)
14:00	クレイグ病院 病院紹介 / 院内ツアー(3グループに分かれて)
16:30	移動(チャーターバス) 17:00 ホテル到着、解散、夕食(各自 or ホテル無料軽食バー)
9月6日(水)	
	コロラド州立大学(CSU)組
06:30	ホテル出発(乗用車)
08:00	07:35 長距離バス バスタングに乗車(@ユニオン駅)
09:00	加藤先生(CSU 准教授)によりピックアップ (@フォートコリンズ・ダウタウン駅)
10:00	<p><午前> • VR ラボ • 動物病院</p> <p><昼食> • CSU 学食</p> <p><午後> • 加藤先生研究室にて実験 • 大学院生と交流</p>
16:00	移動(チャーターバス)
18:00	移動(乗用車) 19:30 ホテル到着、解散、夕食
	レジス大学組
	ホテル出発(チャーターバス)
	<p><午前> • 大学・プログラム紹介 / 歓迎スピーチ • 実習参加(2グループに分かれて) ① 高齢者転倒アセスメントと介入 ② フェルデンクライス・メソッド</p> <p>• レクチャー • 帝京大学学生によるプレゼンテーション(3グループ)</p> <p><昼食> • ピザランチ学生交流会</p> <p><午後> • 特別解剖実習(大腿部) • キャンパスツアー</p>
	移動(チャーターバス)
	17:00 ホテル到着、解散、自由行動 夕食(各自 or ホテル無料軽食バー)
9月7日(木)	
08:00	ホテル出発(チャーターバス)
09:00	センチュラ EMS & プレホスピタル・サービス パラメディック・プログラム ウェルカムレクチャー / レクチャー2(プログラム紹介)
10:30	聖アンソニー病院 院内ツアー(3グループに分かれて見学)
12:30	パラメディック・プログラムの学生とサンドウィッチランチ交流会
	EL
13:00	移動 消防署見学 @ Denver West Metro #4
	PT/OT/NS/RT/CE
	センチュラ EMS & プレホスピタル・サービス パラメディック・プログラム (2グループに分かれて) • パラメディック実習参加: 気道管理のシナリオスキル • ステイディアム・メディカル社の救急車見学
16:00	移動(チャーターバス) 17:00 ホテル到着、解散、夕食(各自 or ホテル無料軽食バー)
18:30	フェアウェル BBQ ディナー (@ホテル中庭)、 研修修了証書授与式 、適宜解散
9月8日(金)	
02:30	チャーターバスへの荷物乗せ込み開始 → 02:45 ホテルチェックアウト → デンバー国際空港チェックイン デンバー国際空港(06:15 発) → シアトル・タコマ国際空港(08:20 着) → シアトル・タコマ国際空港(10:50 発)
9月9日(土)	
14:00	羽田空港着 → 羽田空港(19:00 発) → 福岡空港(20:50 着) → 解散

<主な研修内容>

1) オリンピック&パラリンピック・トレーニング・センター (U.S. Olympic & Paralympic Training Center) 見学

9月の第1月曜日、Labor Day（勤労感謝の日）は、コロラド州中南部の都市コロラド・スプリングスにあるオリンピック&パラリンピック・トレーニング・センター（OPTC）を訪問した。アメリカのアマチュア・トップ・アスリートたちが各種トレーニングを行える施設であり、すべてが民間企業による寄付や市の支援によって運営されている。この施設では、理学療法士、生理学者、栄養士、心理学者などスポーツ医療に携わる専門家が働き、あらゆる面でアスリートたちをサポートしている。過去にバスケットボール選手として活躍していた施設長の案内で、屋内トレーニング室、射撃練習場、レスリング練習場、スイミング・プール、体育館など各種トレーニング施設を見学した。また怪我をしたアスリートたちの治療やリハビリを行うスポーツ・メディシン部署も特別に見学させてもらった。PT 学生を中心に、リハビリテーションに関する日本との相違点など専門的な内容から、アメリカにおける PT 教育に関する内容まで様々な質問が活発に飛び交い、充実した施設訪問となった。



OPTCにて

2) アドベントヘルス・パーカー病院 (AdventHealth Parker) 訪問

① レクチャー 1 「アメリカにおけるヘルスケア・システムと他職種連携ケア」朝倉由紀先生（緩和ケア高度実践看護師/ナースサイエンティスト）

レベル II 外傷センターのある急性期病院であるアドベントヘルス・パーカー病院（旧センチュラ・パーカー・アドベンチスト病院）では、日米で幅広く活躍している朝倉先生より、アメリカにおけるヘルスケア・システムとアドベントヘルス・パーカー病院における実践についてのレクチャーが行われた。日米の保険制度の違いや、アメリカの様々な医療的ケア施設、医療における諸問題、言語バリアの問題などについて、学生が考えやすいよう質問形式で話を進め、わかりやすく説明をされた。特に、言葉が通じない場合についての話になると、学生は、単に言葉が通じれば良いという問題ではなく、多文化国家であるアメリカでの医療における「平等」とはどういうものかについて真剣に考える良い機会となったようであった。



朝倉先生のレクチャー

② レクチャー 2 「精神的ケアとチャプレンの役割」マシュー・マンダル氏（アドベントヘルス・パーカー・チャプレン）



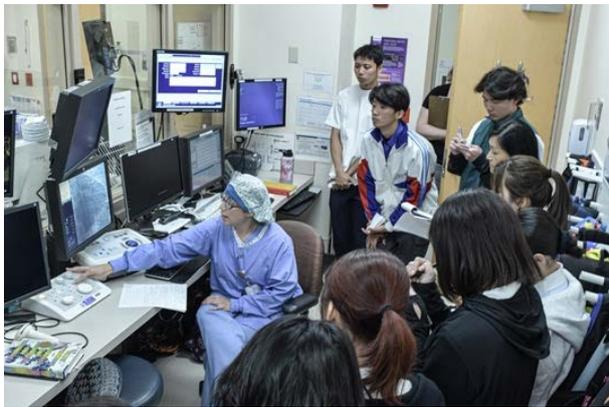
マンダル氏（チャプレン）

朝倉先生のレクチャーの後は、この病院のチャプレン（chaplain）であるマシュー・マンダル氏よりレクチャーが行われた。チャプレンというのは、教会には属さず、病院などの施設や組織で働く聖職者のことであり、あらゆる宗教の人々を含む全人的医療（holistic medicine）に基づいた心のケア・ワーカー（spiritual emotional care worker）であるという。医療が体のケアを主にを行うのに対し、チャプレンは心のケアを行うのだ。また、チャプレンのサポート対象が、患者やその家族だけでなく看護師や医療スタッフ全体を含むこと、デブリーフィングやその具体的な方法を聞いて、学生たちは、この日本にはない独特なシステムに対して理解を深めるとともに、病院で働く人たちが心身ともに健康であることが大事にされていることに感銘を受けていたようである。

③ 院内ツアー

朝倉先生とマンダル氏のレクチャーの後、学生たちは 3 つのグループに分かれて病院見学を行った。グループについては、他職種連携を意識して、学科の偏りがないようなグループ構成を行い、病室、緩和ケア病棟、放射線治療室、カテーテル検査室、リハビリテーション・ルーム、救急救命病棟、産科病棟と分娩室を見学した。それぞれの施設を見学する際に、各グループにおいて、専門について知識のある学生が、他学科の学生に説明しながら見学し、互いに理解を助け合おうとする姿が見られた。それぞれ専門分野について質問がたくさん出ており、学生たちは日本との共通点や相違点を確認していたようである。また、病室では、まだ試行段階である Hercules という「患者とシーツが自動で上方へ移動するベッド」を見学・体験させてもらい、学びの多い施設見学であったと思う。

院内ツアーの後は、会議室に戻り、昼食をとりながら、リハビリテーション・スーパーバイザーであるメロニー・ギャグノン氏が、「アドVENTヘルス・パーカー病院のリハビリテーション・サービス」について、そしてケア・マネージャーとして最近職場復帰を果たしたメリッサ・ミラー氏が、「個人的経験」について話をしてくれた。スケジュールが押したため、時間の制約があったギャグノン氏のレクチャーは十分には聞けず残念であったが、ミラー氏は、自身が落馬して 5 か所の骨折と臓器損傷という重傷を負い、片足を失った経験と、その後の手術・治療・リハビリテーションの経験について話をしてくれた。そして現在使っている義足を着脱して見せ、仕事に復帰するまでにどれだけの困難があり、そして他職種の人々に助けられてきたかを語ってくれた。ミラー氏の壮絶な経験を聞いて、感動し涙を流す学生もおり、学生たちは人の生きる力や様々な人々のサポート力、そして自分たちが目指す仕事の重要性をそれぞれに見つめ直すことができたと思う。



カテーテル検査室



朝倉先生に質問する学生たち

3) クレイグ病院 (Craig Hospital) 訪問

クレイグ病院は、*US News & World Report* による全米トップ 10 リハビリテーション病院に 1990 年にランキングして以来、33 年連続ランクインする、脊髄損傷と外傷性脳損傷を専門とする亜急性期リハビリテーション病院である。はじめに、PT 部門の教育コーディネーター兼臨床指導者であるコートニー・ウルフ氏から、病院の歴史、施設概要、職員の職種と人数、院内リハビリテーションの特徴などについてのレクチャーがあった。その後、アドVENTヘルス・パーカー病院の時と同じように、他職種連携を意識した 3 つのグループに分かれて病院見学を行った。エンジニア部門となる車椅子クリニックでは、車椅子の部品が所狭しと並べられ、患者のニーズに合わせて車椅子がカスタマイズされていることを知り、学生たちは驚きの表情を浮かべていた。PEAK センター (PEAK は Performance, Exercise, Attitude, Knowledge の頭文字) では、大きなリハビリテーション・マシンやプールもあるエクササイズ・センター、様々な障害物がある中を車椅子の練習ができる屋外のトレーニング・パーク、車や飛行機の移乗や、車椅子に乗った状態でベビーカーを押すなど子育てを想定した練習ができるトレーニング・ルーム、レクリエーション・エリア、施設利用者の家族の宿泊施設などを見学して回り、施設・設備の充実ぶりに学生たちは圧倒された様子であった。この施設は、「リハビリテーションを楽しく」をモット



ガイドをしてくれた 3 名の先生のアドバイスに耳を傾ける学生たち

ーとしていて、学生たちは施設利用者の積極的な姿勢と笑顔からそれを感じとっていた。患者、家族、そしてスタッフが一つのファミリーとして、この環境の中で社会復帰へ向かう流れを、学生たちは感じ取れたのではないかと思う。最後に、ガイドしてくれた3名の先生から、常に患者から学ぶこと、スタッフや患者と知識を共有すること、互いにコミュニケーションを大事にすること、継続して学び続けることなどのアドバイスを得て、充実した施設訪問となった。

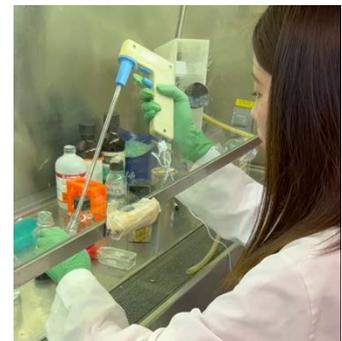
4) コロラド州立大学 (Colorado State University : CSU) 訪問

CE3年1名とRT2年1名は、コロラド州立大学 環境・放射線健康科学科 加藤宝光 准教授のご厚意により、レジス大学とは別に、学生の専門により近い施設のあるCSUを訪問した。渡航前より、学生2名と加藤先生はオンラインで顔合わせをし、事前にリサーチをして、見学したい施設や体験したいことなどのヒアリングおよび共有を行っていた。デンバーからCSUのあるフォート・コリンズまでは長距離バスを使い、学生が降りる場所を間違えるハプニングもあったが、連絡を取っていただけ問題なく加藤先生と合流しCSUまで行くことができた。



VRラボにてAR体験

はじめに、学生たちはVRラボを訪問し、心臓の聴診や刺さった針の除去などをVRで行い、その後ARシステムも体験させてもらった。CE学生はARの研究をしたいという希望を持っているため、アメリカならではのARの使い方などの発見もあり、多くの学びがあったようである。学食で昼食をとった後は、獣医学部付属教育動物病院を見学。ここは世界トップクラスの腫瘍科があるところである。X線、CT、MRI、PET-CT、リニアックまで揃っており、人間と動物の撮影の仕方の違いなどを学ぶことができたようだ。訪問したときはちょうど犬の手術中で、その様子も見学させてもらえたという。最後に加藤先生のラボへ行き、DNAの培養とDNA損傷の実験をさせてもらった。なかなか経験することのできない実験を体験し、現地の大学院生との交流を通して、自分の専門分野でないことであっても、いろんなことに興味・関心のアンテナを張っておくことが大事であると実感したようであった。その他にも、いろんな研究機材や薬品などを見せてもらい、大いに刺激を受けてきたようである。



実験をするRT学生

5) レジス大学 (Regis University) 訪問

レジス大学では、OT学科及びNS学科が10kmほど離れたキャンパスに引っ越しをしているため、PT学科を中心とした研修内容となった。まず、PT学科のマーク・レンキング学科長とアイラ・ゴーマン学科長補佐が、大学全体の紹介を行い、PT学科のプログラム・ディレクターであるヘイディー・アイグスティ先生がドクター・プログラムについての説明をした。当プログラムはPTとしてのスキルだけでなく、文化間の違いやヘルスケアに対する不平等を解決するようなヘルス・ジャスティスを目指しており、多様性を大事にしているということであった。また、3週間前にPT博士課程に入学した日系学生である「なっちゃん」が、サプライズとして日本語で歓迎スピーチしてくれた。学生たちは、彼女のスピーチに親近感を感じるとともに、1000名以上の応募がある中84名しか合格できない狭き門に三度目の挑戦で合格したという彼女の努力に感服している様子であった。日本とは違う大学プログラムに対し、学生からは多くの質問が出ていた。



日系学生「なっちゃん」

① 実習参加

大学・プログラム紹介の後には、2グループに分かれて、運動療法（フェルデンクライス・メソッド）と高齢者転倒アセスメントと介入の実習に参加した。フェルデンクライス・メソッドは日本では理学療法に用いられない概念であるが、手技は日本で用いられる運動療法、特に感覚受容器と脳の処理システムを活用した手技と変わらないことを説明すると、学生も理解することができたようであった。また高齢者転倒アセスメントでは、現地学生と本学学生とで5名のグループを作り、アセスメントシートを用いて、血圧測定をし合ったり、様々な運動

を行ったりしていた。どちらの学生たちも、ジェスチャーやスマートフォンの翻訳機能をうまく使い、互いにコミュニケーションをとりながら進めていたようだった。



フェルデンクライス・メソッド



高齢者転倒アセスメント

② レクチャー「アメリカの DPT 教育と実践」ライアン・ヴァレンチノ先生

2018 年度の本研修の際に、レジス大学の大学院生として交流会に参加してくれたライアン・ヴァレンチノ先生が、現職者としてアメリカの DPT の教育と実践についてレクチャーを行った。そしてその後、治療手技のデモンストレーションを本学学生に対し実施してくれた。デモンストレーションでは、まず電気刺激を併用したドライニードリングで、下肢の筋肉のリハビリと神経の再教育をする様子を見せてくれた。また、首の可動域を確認し、マニピュレーションと呼ばれる手技療法を実施してくれた。ドライニードリングはいわゆる“鍼”治療であり、日本の PT は認められていない。

米国内でもすべての州で認められているわけではない。初めての光景に全員の学生が興味深く見学し、多くの質問を行った。また、ヴァレンチノ先生は、日系人ということもあり、大学院生であった 2018 年の研修の時から本プログラム内の交流会に参加しており、本学の学生教育に理解・協力いただいている。



ドライニードリングのデモンストレーション

③ 帝京大学学生によるプレゼンテーション



NS 学生のプレゼンテーション

PT 学生 1 名と OT 学生 2 名で “PTs & OTs in Japan” 「日本の PT と OT について」というタイトルでプレゼンを行った。前半、PT 学生が自分の学生生活をユーモラスに語り、大きな笑いをとって印象づける一方、後半は日米の PT と OT の違いを数字で示し、バランスの取れた発表を行っていた。最後に EL 学生 5 名が “Emergency Lifesaving in Japan” 「日本の救急救命」というタイトルで、日本の救急救命の歴史

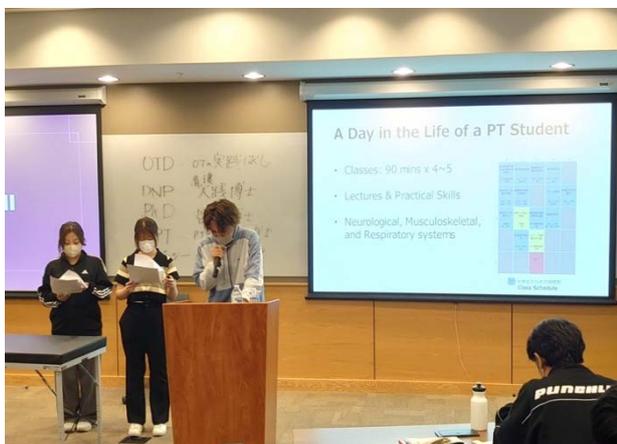
今年度は初の試みとして、プレゼンテーション希望者を募り、3 つのグループを作ってレジス大学の学生・教員に向けて英語によるプレゼンテーションを行った。まず NS 学生 4 名が “Japanese Culture: Otsukimi (Moon Viewing Festival)” 「日本文化：お月見」というタイトルで、日本の四季について説明し、秋の風物詩である「月見」について紹介した。駄菓子のお餅を持参して、発表中にレジス大学の学生・教員に配り、実際に食べてもらうという工夫があり、非常に好評であった。次に



駄菓子を試食するレジス大学の学生

や働く場所などについて説明をした。アメリカでは救急車が有料であるため、日本の救急車が無料であることを聞いた時には驚きの反応が見られた。どのグループも短期間で準備をしなくてはならず、スライド・スクリプト作成だけでなく、発音に注意しながら何度も音読・デリバリーの練習をし、完全ではないにしても、観客をいかに巻き込んで楽しませるかを考えて十分に工夫した発表ができたと思う。またレジス大学の学生たちも意欲的に聞いてくれて、発表者たちの自信につながるようなとても貴重な経験となったと思う。

プレゼンテーションの後は、レジス大学の学生とのピザランチ交流会を行った。日本人学生がプレゼンテーションを行ったことで、お互いにも紛れ、話題も提供され、交流しやすかったのではないと思う。日米どちらの学生たちも、上手にスマートフォンの翻訳機能などを使いながら交流を楽しんでいたようであった。



PT&OT 学生のプレゼンテーション



EL 学生のプレゼンテーション



レジス大学の学生たちと

④ 解剖実習とキャンパスツアー

午後は2グループに分かれて解剖実習参加とキャンパスツアーを行った。解剖実習では、レジス大学の学生たちが精力的に取り組むなか、本学学生も実際にメスを手にした。大腿部の結合組織の剥離や筋の剖出などレジス大学の学生と共同で行った。解剖実習は見学したことのある学生もいたが、実際に解剖をするのは初めてであったため、体調不良者が出ることが懸念されたが、そのようなことはなく、みな現地学生とともにとても熱心に体の仕組みについて学んでいた。筋の名称や走行については、本学学生の方が大学院入学直後の現地学生よりも習熟度が高く、尊敬される場面もあったようだ。また、テーブルの上に、脳や脊髄の標本を出してもらい、実際に手に取



レジス大学教員へのお礼の挨拶

って観察するなど大変貴重な学びの時間となった。キャンパスツアーでは、ヴァレンチノ先生のガイドで、現地学生が日頃使う教室や、病院と全く同じような設備を備えたシミュレーション・ルーム、キャンパス内にある大きな教会などを見学した。最後にレジス大学の先生方に見送られ、帰路についた。現地学生と交流し、本学学生の自信につながった実りある一日であった。

6) 聖アンソニー病院 (St. Anthony Hospital) 訪問

① レクチャー1 「アメリカの EMS (Emergency Medical Services) 」 トレイシー・コリンズ先生

レクチャー2 「フライト・フォー・ライフ」 スコット・フィリップス先生



トレイシー・コリンズ先生

聖アンソニー病院での EMT (Emergency Medical Technician) 研修プログラムは、以前より実施の可能性がありながら実現しなかったコンテンツであったが、2020 年度にコロナ禍で行ったオンライン海外研修 (VEP) に EL 学生が参加し、オンライン・プログラムとして繋がりを持つことができたことがきっかけとなり、今年度初めて EL 学生のデンバー研修参加を受けて実現したコンテンツである。まずは、かねてより意欲的に本プログラム・コンテンツの計画に協力してくれていたパラメディック・プログラム・コーディネーターのトレイシー・コリンズ先生から、アメリカの EMS の歴史や EMT とパラメディックの相違点、EMT・プログラムとパラメディック・プログラムについて、EMS のこれからの課題についてレクチャーがあった。

EMS トレーニングは病院ベースのプログラムであるが、ここ 20 年ほどでコミュニティ・カレッジや大学のプログラムに移行しつつあるということだ。またコロラド州周辺で唯一の Trauma Room 10

(T-10) という高速エレベーターで接続されている緊急手術室についても紹介してくれた。その後、プレホスピタル・サービス全体のディレクターであるスコット・フィリップス先生より、国内初の個人病院ベースの医療用ヘリコプターで、アメリカで最も実績のある救命救急搬送プログラムである「フライト・フォー・ライフ」

(日本ではドクターヘリ) についての説明があった。1972 年に始まり、今では 9 つの州を繋ぐプログラムとなっているということであった。ここでも学生たちは盛んに質問を投げかけ、積極的な姿勢を見せていた。



スコット・フィリップス先生

② 院内ツアー

レクチャーの後、パラメディック・プログラムがある建物から徒歩約 10 分のところにある聖アンソニー病院へバスで移動し、今回も 3 グループに分かれて院内見学を行った。事前に依頼していたわけではなかったが、ジェネット・バーグストロム看護部長が自ら院内を案内してくれた。4 ユニット 24 床・全個室の ICU、救急車から直接個室に搬送され処置をすることができる ER を見学し、それぞれ病棟の看護師やパラメディックと話をする時間を設けてくれた。看護師たちは非常に明るく、気さくで、話をするだけで元気を



ICU で働く看護師たちと



フライト・フォー・ライフ



医療用ヘリを見学し質問する学生たち

もらえそうであった。またアメリカでも投薬ミスが相次ぎ、最近はすべてコンピュータ管理になった現状等を説明してもらい、200万もの薬剤を一元管理できる自動調剤システムであるピクサスを見せてもらった。心臓カテーテル室では手術直前の準備の様子を見学した。そして、ヘリや救急車で搬送された重症患者を高速エレベーターで運び緊急手術を施行するシステムであるT-10など、学生たちは聖アンソニー病院独自の救命センターの構造・設備・管理に触れることができた。フライト・フォー・ライフについては、パイロット1名とフライトナース2名が案内してくれた。医療用ヘリコプターにはドクターが乗ることはなく、中で処置を行うのはフライトナースかパラメディックであるという説明に、学生は驚くと同時に、フライトナースとパラメディックのレベルの高さを痛感していたようであった。6日目ということもあり、学生たちは随分とアメリカの学びの雰囲気慣れ、空いている現地スタッフを見つけては次々と質問をしている姿が印象的であった。

③ パラメディック・プログラムの実習参加と救急車見学

ランチ交流会の後、EL学生は消防署見学へ行き、その他の学生は2グループに分かれて、救急車見学とパラメディックの実習参加を行った。救急車見学ではスタジアム・メディカル社の救急車を見せてもらい、実際に中に入ってその設備の説明を受けた。多くの種類の薬剤と常に整理整頓するための色分けシステムなどを聞き、学生たちはさらにはたくさんの質問をして、具体的かつ貴重な話をスタジアム・メディカルの創設者兼パラメディックであるロジャー・エイムズ氏から引き出していた。パラメディックの実習では、ビデオ喉頭鏡を使った気管挿管と気管切開の練習をした。アンドリュー・ウィトル主任教官や現地学生から手技手順を学び、その後、本学学生が一人一人実施した。それぞれぎこちないながらもコツを教えてもらい、できた時には笑顔が見えた。また、現地学生が、救急蘇生のシナリオ試験を受けているところを見学させてもらった。リーダーと共にチームが協力してテキパキと行動している現地学生の姿を見て、本学学生も少し緊張した様子であったが、真剣に試験の様子を見つめていた。



救急車の中



気管挿管の練習



気管切開の練習



パラメディック・プログラムの学生たちと

④ 消防署見学

もともと消防署見学は本プログラムにはなかったコンテンツであった。しかし、本キャンパスの EL 学科からの強い希望があり、交渉を続けた結果、団体を受け入れる体制がどうしても取れないということで、今回は希望のあった EL 学生のみということで受け入れが可能になったのである。今回はトレイシー先生や現地コーディネーターの協力によって、レイクウッド市にある“West Metro Fire Rescue”の訪問が実現した。到着後、早速消防署内の見学ツアーを実施。トレーニングジム、キッチンダイニング、シアタールームなどを見学したが、日本とはコンセプトもスケールも異なるため、学生は終始驚いていた。ガレージにて救急車と消防車の見学を行い、キャプテンのプレット・バーク氏へ積極的に質問を行った。ハイレベルな業務もさることながら、「隊員は第 2 の家族だ」と強調され、チームの信頼関係が重要であることが理解できた。救急車も日本よりも大きく、最大 3~4 人を処置搬送可能とのことであった。消防車は、一般的な車両に比べて約 1.5 倍もの大きさがあり、ロッキー山脈の山岳救助にも対応できる装備を搭載している。それら装備のひとつひとつを丁寧に解説していただいた。最後に防火服とエアボンベ等装備品の装着訓練を実際そのまま行うところを見学した。ベテラン消防士と若手で競争し 2 分以内の完了を目指す、当然だがベテラン消防士が迅速・確実に完了し、学生は修練の重要性を痛感していた。



キャプテンに積極的に質問する学生たち



消防署の人たちとともに

7) フェアウェル BBQ デイナーと研修修了式

聖アンソニー病院訪問を終え、16:30 にホテルに帰着し、18:00 からホテルの中庭でフェアウェル BBQ 及び研修修了証書授与式を行った。ある程度食事をしたところで、一人一人に研修修了証の授与を行い、学科毎に代表者が前に出て、研修の良い思い出・残念な思い出についてスピーチをしてもらった。最終日ということもあり、最初の頃とは違って、学科・学年を超えて皆が仲良くなっており、研修の仲間として交流し互いを認め合う姿が非常に微笑ましかった。

<まとめ>

2023 年度は、4 年ぶりのデンバー研修再開ということで、様々な困難が立ちはずだかり、乗馬やキャンプといった例年行ってきた文化体験を省き、1 日短縮して実施した研修であったが、現地コーディネーターであるグッドマン・サム&知子夫妻の長年の知恵と経験の上に培われたコーディネート力と協力のおかげで、あらゆる面でこれまでにない素晴らしい海外医療研修にすることができたと思う。8 日間という短い期間であり、かつ直行便ではなく経由便での渡航により過密スケジュールであったため、体力的にも厳しい研修だったと思うが、参加した学生の満足度は非常に高く、また、「文化体験も良かったが、医療研修のほうが充実していて学ぶことが多く、学ぶことがとても楽しかった」という声が多く、海外の医療制度を学ぶ」という目的が十分に達成された海外医療研修であったと思う。これこそ単なる海外研修ではない、帝京大学福岡キャンパス独自の海外医療研修の醍醐味であり、魅力の一つであることは間違いなく確信した研修であった。



美術館散策



MLB 観戦



レッド・ロックス・パーク・ハイキング



研修修了証書授与式